

『平成26年度 指導部の目標と9人制の重点指導項目』

J V A国内事業本部 審判規則委員会 指導部

1 目 標

- (1) 審判員は、公平な立場で試合を運営し、ルールを正確に適用して選手・観衆の目線に立ったレフェリングを心がけ、バレーボールの魅力を十分に引き出せるような審判実践を行う。
- (2) 審判員は、役員、競技参加者に対して講習会等を通して積極的にルールの理解を図り、相互の信頼関係を築けるように努力する。
- (3) 審判技術の向上を目指すために日々の研鑽に努める。

2 重点指導項目

【主 審】

I 権限と責務

第29条第1項「権限」、第2項「責務」を十分理解し、**試合全体をコントロールする**。特に下記の項目については、毅然とした態度で臨む。

- (1) チームメンバーによる不法な行為（相手に向かって“ガッツポーズ”などで挑発・威嚇する行為など）に対して、第27条「不法な行為」に則って罰則を適用する。また、審判団（副審・線審等）に、チームから判定に対するクレームがあった場合は、その内容を確認し、適切に対応する。
- (2) 判定に対する質問は、ゲームキャプテンのみであるので、監督や他の選手からの質問は受けつけない。

II 判定について

- (1) ネット際の判定
 - ① タッチネットの判定
タッチネットの判定は、副審に頼るのではなく、主審が見える範囲は判定しなければならない。
 - ② オーバーネットの判定
ブロッカーとボールの接点を確実に見て判定をする。（オーバーネットの反則が起きる接点に視点を置く）
特にタッチプレーの際にオーバーネットの反則がおきている場合があるので、十分に注意する。
また、ブロック後にボールが落ちた位置で判定してはいけない。
複数のブロッカーの場合には、どの部分にボールが接触したかを確実に捉えて判定する。
ブロック後のフォローの手がオーバーネットしても反則ではない。
 - ③ ブロック行為なのか、そうでないかを判定をする。（ブロック後優位なプレーにならないようにする）ブロック行為でない場合、同一選手が続けてプレーすることはドリブルの反則になる。他の選手がプレーした場合もハンドリングにバラツキがあるとドリブルの反則になる。
 - ④ **ブロック後の接触回数を正確に判定する。（1人が連続して3回プレーするなど）**
 - ⑤ ネットプレーの際にインターフェアの反則がないかを意識しながら判定する。相手選手の行為がネットプレーの妨げになるケースはインターフェアの反則である。
- (2) ハンドリング基準
 - ① **2回目・3回目のハンドリング基準を確立させる。ボールと身体が接触する瞬間を良く見て判定する。ラストボールをパスで相手コートに返球する際も確実に判定する。**

- ② ネットプレーの判定で「ボールを掴んで（両手でボールを止めてネットに当てる。または、片方の手でボールを投げる様なケース）ネットプレーをする」ときのホールディングや「ネットプレーの後のオーバーパス」などがホールディングやドリブルになることがあるので注視する。
 - ③ ブロック後の吸い込みボールを上げるプレーは形にとらわれず、ボールが身体と接触した際にボールがとまっているかを確実に確認する。
 - ④ タッチプレーの際、ボールを運んだり、持ち上げてホールディングの反則になっていないか、しっかり判定する。
- (3) アンテナ付近の判定
ボールがアンテナに触れたのか、選手がアンテナに触れたのか、どちらのチームが反則になったのか正確に判定ができるようにする。
- (4) オーバータイムスの判定
オーバータイムスの判定は、思い込みで判定するのではなく、副審と協働で判定する。

【副 審】

I 権限と責務

第30条第1項「権限」、第2項「責務」を十分理解し、試合の状況を把握して主審を補佐することを意識しながら、自身の責務を遂行する。

- (1) プロトコール中、コートของทีม構成員を構成メンバー表で確認をする。
- (2) ベンチ（ウォームアップエリアを含む）にいるチームメンバーの不法な行為に対してコントロールし、主審に報告する。
- (3) 記録員の任務をコントロールする。
- (4) サービス順が間違っている場合の手続き、不当な要求、遅延や不法な行為の記録などが完全に行われているかを確認する。
- (5) 第2セット、第3セット開始時に、監督がメンバーの変更等申告のない場合は、監督に速やかに確認を行う。
- (6) 次セットのサービスチームを記録員と協働で確認する。その際は、前のセットの最終サーバーがどちらであったかを記録用紙で必ず確認する。

II 判定について

- (1) ネット際の判定
 - ① タッチネットの反則は、第20条第3項を理解し、正確に判定をする。特にアタック後にネットの網目の部分に触れる反則が判定できるように目を残す。
 - ② 主審にワンタッチのハンドシグナルを送るタイミングは、1本目のレシーブ後である。ハンドシグナルを送るときは、主審と目を合わせる。
- (2) アンテナ付近の判定
ボールがアンテナに触れたのか、選手がアンテナに触れたのか、どちらのチームが反則になったのか正確に判定ができるようにする。
- (3) 許容空間外側のボール通過の判定
 - ① アンテナ付近を通過する許容空間外側の判定では、位置取りを速くし正確に判定できるようにする。
 - ② ボールが副審側のアンテナ外側を通過した場合、または、主審後方の許容空間外側を完全に通過した場合は吹笛する。
- (4) 競技中断の手続き
 - ① 複数の選手交代の手続きを1組ずつ正確に行う。（記録員との協働）
交代選手が準備していないときや、その交代が不法な場合は拒否をして、主審に遅延の手続きをするように合図する。
 - ② ゲームの流れを読み、チームの要求に速やかに対応する。

ワンラリー毎にベンチコントロールを行う。

- ③ タイムアウト後、コートに入ることが遅くなるような場合、吹笛とシグナルで促し、繰り返す場合は何回も吹笛して促さずに、遅延の罰則を適用する。
- (5) ボールとの接触
主審と同様にボールとプレーヤーの接触回数をカウントし、明らかにオーバータイムになった場合は、胸の前で主審に補助シグナルを送る。
- (6) サービス順の誤りの手続き
サービスの誤りの反則がおきた場合、速やかに処置ができるように手順を確実に把握する。
- (7) ゲームコントロール
コートワイピングのシステムを十分に理解し、チームが故意にゲームを遅らせるような行為は遅延の対象となることを理解する。

【記録員】

I 権限と責務

第31条第1項「権限」、第2項「責務」を十分理解し、自身の責務を遂行する。

- (1) プロトコール中、コートのチーム構成員を記録用紙で確認をする。
- (2) サービス順および得点の確認を正確に行い、記録をつける。
- (3) 次セットのサービスチームを副審に報告する。
- (4) タイムアウト及び選手交代を記録し、その回数を副審に報告する。
- (5) 複数の選手交代の手続きを1組ずつ正確に行う（副審との協働）
記録員は、交代が正規であるならば、必ず副審と目を合わせて片方の手を挙げる。選手交代の記録を完了した後、副審に両方の手を挙げて、記録が完了したことを報告する。複数の選手交代の場合は、上記の手続きを繰り返す。
- (6) 記載ミスをした場合は、二重線で消す。主審・副審が確認したときに誤りがあったときは、記録員が修正する。
- (7) サービス順の誤りの反則がおきた場合、速やかに処置ができるように手順を確実に把握する。
※サービス順の誤りの事象を記録用紙上で確実に捉え、副審に報告する。
例) ○番がサービスを打つところ、○番がサービスを打ちました。次のサーバーは○番です。

【線審】

- (1) 担当するラインの判定を確実に行う。ワンタッチは、確実に見えた場合に限りフラッグシグナルを示す。
- (2) アンテナに関わる判定方法を確認し試合に臨む。
- (3) 選手がアンテナに触れた場合、フラッグを振り選手を指す。